

「右手の萎えた人」

ルカの福音書 6:6~11

はじめに

前回と同様に今日の内容も「安息日」についてのイエシュアと当時のユダヤ人の指導者であったパリサイ人、律法学者たちとの問答を記した場面です。ルカの福音書にはこのような「安息日論争」が四箇所に記載されていますが、この数は福音書の中で最も多く、筆者の「安息日」に対する重要性を意識する強さがうかがえます。今日はその二箇所目になりますが、そもそもこの「安息日」とは一体何なのかということについて、まず聖書の原語であるヘブル語の視点から述べておきたいと思います。これを意味するヘブル語のシャバット(שַׁבָּת)とは、「休む、やめる、終わらせる」という意味のシャーフアト(שָׁפֵאוֹת)からできた言葉であることは以下の御言葉、十戒とも呼ばれるモーセの律法から見て明らかです。

出エジプト記【新改訳 2017】

20:8 安息日を覚えて、これを聖なるものとせよ。

20:9 六日間働いて、あなたのすべての仕事をせよ。

20:10 七日目は、あなたの神、【主】の安息である。あなたはいかなる仕事もしてはならない。あなたも、あなたの息子や娘も、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、またあなたの町囲みの中にいる寄留者も。

20:11 それは【主】が六日間で、天と地と海、またそれらの中のすべてのものを造り、七日目に休んだからである。それゆえ、【主】は安息日を祝福し、これを聖なるものとした。

十戒の一つであるこの戒めは、他の九つの戒めと異なっている点があります。それはこの戒めだけは個人的な、一人ひとりに対するものというだけではなく、その人の「家」に対するもの、すなわち家族およびその人の「町囲みの中」にいるすべてのものを一括りにし、その一単位とした集団に対して定められたものということなのです。このように「安息日」の教えだけは、個人ではなく家、町、国に対して定められた教え、戒めなのです。ちなみに「安息日」シャバット(שַׁבָּת)というヘブル語のこの綴りは、「帰る、戻す」という意味のシューヴ(שׁוּב)と、「家、宮、家族」を意味するバイト(בַּיִת)が組み合わさった合成文字として見ることができ、つまりシャバットという言葉には「家に帰る、宮にとどまる」という意味合いがあるということなのです。そしてこの家とはもちろん、イスラエルの家でありその民、そして何より彼らの神であられる主の宮、エル

サレムの神殿です。そしてそこにつながる「町囲みの中にいる寄留者」すなわち私たち異邦人の教会もここに含まれます。神の御子イエシュア・メシアのみもとにイスラエルと教会を立ち返らせ、とどまらせ、一つの民としてともに住まわせる家、すなわち「御国、神の国」と呼ばれるその成就、その完成する日を待ち望み、目をとめ続けること、それがシャバット「安息日」の教えなのです。昨今のコロナ禍により外出の自粛、ステイホーム、自宅にとどまることが勧められ、誰もが窮屈さと息苦しさを感じている毎日ですが、もしこれを行わなかったら、もっと多くの感染者、死者を出したことでしょう。そしてこの現実



見方を変えれば、神のなさろうとしておられること、ご自分の民をその家にとどませる、住ませるといふご計画が表されたものと捉えることもできるのではないのでしょうか。感染を免れるために自宅にとどまるように、滅びを免れる、すなわち救われるために「神の国」に入り、とどまること、その重要性を、私たちは常に覚えている必要があるのです。それでは今日の内容に入ってまいりましょう。

1. 右手

ルカの福音書【新改訳 2017】

6:6 別の安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに右手の萎えた人がいた。

6:7 律法学者たちやパリサイ人たちは、イエスが安息日に癒やしを行うかどうか、じっと見つめていた。彼を訴える口実を見つけるためであった。

6:8 イエスは彼らの考えを知っておられた。それで、手の萎えた人に言われた。「立って、真ん中に出なさい。」その人は起き上がり、そこに立った。

6:9 イエスは彼らに言われた。「あなたがたに尋ねますが、安息日に律法にかなっているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも滅ぼすことですか。」

6:10 そして彼ら全員を見回してから、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、手は元どおりになった。

安息日に会堂に入られたイエシュアの御前に、ひとりの「右手の萎えた人」がいました。律法学者とパリサイ人がイエシュアを「訴える口実を見つけるためであった」とあることから、彼らがあえてこのような人を連れて来たのだと思われます。口伝律法による彼らの考えは、神は安息日には休まれる、働かれないので癒しの奇蹟を行うことはないというものでした。つまりもしここでイエシュアが癒しの奇蹟を行えば、それはイスラエルの神である主からのものではない、そしてイエシュアはメシアではない、偽物であり、偶像、悪霊に仕える者だということになるわけです。しかしここに彼らの二重のトラップがあります。もしここでイエシュアがこの人の右手を癒されなかったとしたら、イエシュアには奇蹟を行う力がない、あわれみ深い神から遣わされた者ではない、イエシュアの神は善ではない、癒しの神、救いの神ではないということになり、つまり癒しても癒さなくてもどちらにしてもイエシュアを貶（おとし）める状況を作り出していたわけです。しかしイエシュアはそのような「彼らの考えを知っておられ」ました。それはただ単に状況のすべてを見抜いて把握していたというだけのものではありません。神の「知っている」は神の所有、神の支配がそこにあることを意味します。口伝律法を否定し、聖書に、モーセの律法を記された神の御心、ご計画を表すために神が、イエシュアが彼らのイエシュアに対するこの策略をも用いてこの状況を神ご自身がお造りになられたということです。ではここにどのような神のご計画が表されているのかを見てみましょう。

ここに登場する「右手の萎えた人」、彼の存在は最初に述べたイスラエルの「町囲みの中にいる寄留者」すなわち私たち異邦人の教会を表しています。聖書でこの「右手」という言葉が最初に使われたのが以下の出来事です。

創世記【新改訳 2017】

48:13 それからヨセフは二人を、右手でエフライムをイスラエルの左手側に、左手でマナセをイスラエルの右手側に引き寄せた。そして二人を彼に近寄せた。

48:14 ところがイスラエルは、右手を伸ばして弟であるエフライムの頭に置き、左手をマナセの頭に置いた。マナセが長子なのに、彼は手を交差させたのである。

48:15 彼はヨセフを祝福して言った。「私の先祖アブラハムとイサクが、その御前に歩んだ神よ。今日のこの日まで、ずっと私の羊飼いであられた神よ。

48:16 すべてのわざわいから私を贖われた御使いが、この子どもたちを祝福してくださいますように。私の名が先祖アブラハムとイサクの名とともに、彼らのうちに受け継がれますように。また、彼らが地のただ中で豊かに増えますように。」



48:17 ヨセフは、父が右手をエフライムの頭に置いたのを見て、それは間違っていると思い、父の手を取って、それをエフライムの頭からマナセの頭へ移そうとした。

48:18 ヨセフは父に言った。「父上、そうではありません。こちらが長子なので、右の手を、こちらの頭に置いてください。」

48:19 しかし、父は拒んで言った。「分かっている。わが子よ。私には分かっている。彼もまた、一つの民となり、また大いなる者となるであろう。しかし、弟は彼よりも大きくなり、その子孫は国々に満ちるほどになるであろう。」

48:20 彼はその日、彼らを祝福して言った。「おまえたちによって、イスラエルは祝福のことばを述べる。『神がおまえをエフライムやマナセのようになさるる』と。」こうして彼はエフライムをマナセの先にした。

これはイスラエルすなわちアブラハムの子イサクの子ヤコブが、マナセとエフライムという自分の孫を祝福するという場面ですが、ここで彼は長子であるマナセにではなくその弟のエフライムに「右手をのぼして」祝福したとあります。結果的にイスラエルは「神がおまえをエフライムやマナセのようになさるる」と二人ともに祝福のことばを述べているのですが、本来ならば長子であるマナセよりも、その先の者として弟のエフライムに対して「手を交差させ」、「私には分かっている」とあえて順序を逆にして彼らを祝福したのです。このように「右手をのぼして」という表現には、祝福の順序を逆にする、というような意味合いが込められているのです。まさにこう言われているとおりです。

マタイの福音書【新改訳 2017】

20:16 このように、後の者が先になり、先の者が後になります。

神にとってイスラエルの民はご自分の長子的存在です（出エジプト記 4:22）。イスラエルの文化習慣において父の家を相続するのはその長男、長子と決まっています。つまりイスラエルの神のその家である「御国、神の国」はこのイスラエルに、その民とその土地に与えられ、建てられます。しかしそれがなされる、その相続が行われる前に、先に弟が祝福を受けるというのが神のご計画だということです。

2. 真ん中

ではその弟的存在である私たち異邦人の教会が、先に受ける祝福とは一体何でしょう。イエシュアはそれを表すためにこの右手の萎えた人に「立って、真ん中に出なさい」と言われました。この「真ん中」という意味のターヴェフ(תָּוֶפֶת)は本来、部屋や土地の中心、中央という意味ではなく、空中、大空を意味する言葉です。

創世記【新改訳 2017】

1:6 神は仰せられた。「大空よ、水の真っただ中にあれ。水と水の間を分けるものとなれ。」

1:7 神は大空を造り、大空の下にある水と大空の上にある水を分けられた。すると、そのようになった。

1:8 神は大空を天と名づけられた。夕があり、朝があった。第二日。

このように、「真っただ中」ターヴェフとは本来「大空」を、そして「天」をも指す言葉なのです。つまりイエシュアはこの人に向かって「立って、真ん中に出なさい」と言いつつも、その御言葉には「起き上がって、よみがえって空中へ、天に上りなさい」という神のご計画を示す御言葉を秘めておられるのです。この秘められた御言葉、神の奥義の現れは、以下の預言の成就以外にはありません。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

そしてイエシュアはこの人に向かって「手を伸ばしなさい」と言われました。ここに使われているパーシャト(פָּרְשָׁה)という言葉は「脱ぐ、はぎ取る」という意味の言葉で、本来は「長服をはぎ取って奪う(創世記 37:23)」という出来事を指しています。この長服とはその家の長子にのみ与えられる特別なものです。それをパーシャト、はぎ取って奪うことを命じられ、許され、選ばれた存在、それが私たち異邦人の教会です。もちろんこの長服は、最後には長子であるイスラエルに返されるのですが、彼らはその歴史の中で何度も何度も神に対して不信の罪を犯し、預言者たちを殺し、ついには神の御子イエシュアをメシアとして受け入れず、十字架にかけて殺したため、神の祝福の右手は、まず私たち教会にのばされたのです。もちろんそれもこれもすべて聖書の御言葉に秘められた神のご計画によるものですが。

3. 神の右

6:11 彼らは怒りに満ち、イエスをどうするか、話し合いを始めた。

イエシュアははじめから、パリサイ人や律法学者たちのように、癒すか癒さないか、何をするかしないかという視点で話をしているわけではありません。イエシュアは常に「いのちを救うこと…滅ぼすこと」救うか滅ぼすかという観点、レベル、基準で語り、歩んでおられるのです。では私たちはどうでしょうか。私たちもまたこのユダヤ人たちのように、人が、そして自分が何をするか、何をしないかというような基

準で歩んではないでしょうか。私はこれをしている、していない、できる、できない、あの人はどうか、この人は…。そんなことばかりを考えて生きてはいないでしょうか。多くの場合、それは悲しみ、いや怒りを引き起こすものとなってしまいます。思い通りにならない、できない自分に対して、そして思い通りにならない人や状況に対しての怒り、パリサイ人たちがイエシュアに対して抱いた怒りもまた、その類のものであったと言えます。彼らの価値基準が聖書にではなく口伝律法にあったために、それに従わない、行わないイエシュアが許せなかったのです。どうでしょうか、私たちが日々一喜一憂する、怒ったり悩んだり、あるいは喜んだり感動したりするその価値基準は、果たして神の持っておられるそれと比べてどうでしょうか。もちろんその差、そのズレ、まさにその次元の違いは非常に大きいと言わざるを得ません。その最も顕著で決定的かつ具体的な現れが、今のこの世にある、朽ちていくものを見ているか、それとも永遠に神とともに生きるその御国を見ているかという違いです。ではイエシュアが見ておられるもの、イエシュアの信仰がどこにあるのかを見てください。

ヘブル人への手紙【新改訳 2017】

12:1 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、一切の重荷とまとわりつく罪を捨てて、自分の前に置かれている競走を、忍耐をもって走り続けようではありませんか。

12:2 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。

イエシュアの信仰、つまりイエシュアの見ておられたものは、「ご自分の前に置かれた喜び」すなわち「神の御座の右に着座」すること、つまり神の長子としてその家である御国を相続し、常に神とともにあって治める者となることでした。私たちはこのイエシュアから、イスラエルの王、御国の王としてのイエシュアから「目を離さないで」いなければならないのです。今日の箇所が登場した右手の萎えた人、いや真ん中に立ち、その右手をのばし、癒された人とは、私たち異邦人の教会を表している「型」であると述べましたが、それは同時に「神の御座の右」におられる御方、御国の王としてのイエシュアを見る者、イエシュアを目指し、イエシュアに向かって歩む者の「型」でもあると言えます。今日も述べたように、やがて私たちは空中でイエシュアと会う、その御前に立つ日が来ます。ですから私たちの目を常にその真実、その事実、その現実^に置き、そこから「目を離さないで」いましょう。そこに手をのばす者でありましょう。そこにこそ神が私たちのために備えられた永遠の安息、真のシャバットがあるのですから。

詩篇【新改訳 2017】

16:11 あなたは私にいのちの道を知らせてくださいます。満ち足りた喜びがあなたの御前にあり楽しみがあなたの右にとこしえにあります。